

日本語動詞文分析における「有界性」の有効性 ——意味的要件としての複数性をめぐって——^{*1}

井本 亮

キーワード：限界性、複数性、多回性、有界性、概念意味論

要 旨

従来、動詞文が表す動作・事態の終結に関する研究では、「限界性」の概念からの説明が行われ、大きな成果を上げてきた。しかし、動詞文の意味解釈には、限界性だけでは統一的な説明ができない現象が散見される。それは対象物の複数性などが事態の限界性解釈を含む文の文法性に深く関わる事例であるが、本来「数」の標示が義務的文法範疇ではない日本語においては、このような問題は捨象されてきた。本稿では、こうした事例を限界性という概念で説明することの問題を論じ、それにかわる概念として、動作の限界性、実体の複数性、経路の限定性をも射程に収める範疇横断的概念である「有界性」を導入する。有界性の導入によって、事態レベルの終結の問題に統一的な説明が与えられる。

0. はじめに

本稿は、日本語動詞文の意味解釈に関わる現象を観察し、ある種の事例の意味解釈が事態の終結性に関する概念「限界性(telicity)」だけでは説明できないことを指摘し、それにかわる理論的道具立てとして、名詞句によって表される「実体(material

*1 本稿は、筑波大学大学院文芸・言語研究科「日本語文法研究(4)」で行った口頭発表「有界性について(全4回)」の内容を直接の素材としている。また、限界性に関する議論において、筑波大学大学院福岡健伸・川野靖子両氏による口頭発表を参考にした部分がある。その他、有益なコメントを下された方々に感謝申し上げる。ただし言うまでもなく、本稿における誤謬等の責はすべて井本にある。

entity, モノ)」と動詞文によって表される「事態(event, コト)」の間の概念的横断性を保証する概念「有界性(boundedness)」が有効であることを示すことを目的とする。事例としては、特に実体の複数解釈(plural reading)に動機づけられた事態の多回解釈(multiple events reading)^{*2}が動詞文の文法性の意味的要件となる事例などを扱う。以下、1節では、限界性に関する先行研究を概観する。2節では、有界性の概念を概観し、その特長を論じる。3節では、有界性による日本語の事例の説明を試みる。4節はまとめである。

1. 先行研究の成果——限界性について——

1.1. 限界性の適用レベル

従来の動詞研究を通じて、動詞の意味的性質として重要な理論的道具立てとして用いられてきた概念のひとつが、いわゆる「限界性」である。ただし、動詞文における限界性の適用レベルについては、大きくふたつの見解がある。

1.1.1. 動詞の語彙的意味素性レベルの限界性

ひとつめの立場は、工藤 1995 に代表される見解で、限界性を動詞の語彙的意味素性として位置づける。ここでは工藤 1995 を継承した須田 2000 の規定を引用する。

- (1) 限界とは、言語的に表現された動作の、時間のなかでの展開におけるしきりである。動作の展開における時間的なしきりとなるのは、まず第一に、そこにいたれば、動作の展開の過程がつきはて、それ以上展開することのできないような、動作の臨界点である。(須田 2000 : 87)

(1) は、工藤 1995 において規定された、動詞のアスペクチュアルな意味素性としての限界性を指す。アスペクト論の流れを受けたこのような限界性は動詞の語彙的分類レベルの対立として位置づけられ、主体/客体というヴォイスの対立とともに動詞分類の基準として用いられてきた。

*2 実体の複数性と事態の多回性との関連性については、Kuno 1970, 五十嵐・山田 1982, 矢澤 1986, 矢澤 2000, 奥野 1992 などを参照されたい。また、日本語の人称代名詞や接辞などの複数性を論じた仁田 1992 は日本語の複数性のあり方を考えるうえで参考になる。

- (2)a. 主体動作・客体変化動詞 } 内的限界動詞
b. 主体変化動詞 }
c. 主体動作動詞 } —非内的限界動詞 (工藤 1995: 73)

動詞は「そこに至れば運動が必然的に尽きるべき目標としての内的時間的限界(工藤 1995: 72)」を語彙的に含意する「内的限界動詞」と、含意しない「非内的限界動詞」に大別される。ここでは、限界性の値(限界/非限界, telic/atelic)は動詞の語彙的問題である。日本語動詞研究における限界性の適用としてはこの見解が一般的と言ってよいだろう。

この見解の特長は、限界性をアスペクチュアルな意味素性として捉えることで、動詞の分類の精密化に成功したこと、アスペクト形式が抽出する意味の演繹的記述が可能になったことである。ただし、この限界性(内的限界/非内的限界)は語彙的な意味素性であるため、後述するような、名詞句の性質が限界性に関与する現象には適用できない。また、限界点を変化点と同一視するため、位置変化動詞や着点句による移動の限界性が明確にされていないという点も問題点として残されている。

1.1.2. 動詞句・事象レベルの限界性

もうひとつの見解は限界性を動詞の語彙的意味よりも大きなレベルである動詞句のレベルとしても設定するもので、工藤 1995における「外的限界」がそれに相当する^{*3}。日本語に関する分析では、工藤の外的限界という立場を継承し発展させた北原 1998, 1999がこの見解の代表といえよう。

- (3) 動詞句の限界性とは、動詞句によって表される事象(event)に限界点が存在するかどうか、すなわち、事象の終了時点(terminative point)の有無に関することを言うものである。(北原 1999: 163)

(3)は北原 1999での規定である。北原は、対格名詞句やマデ句、数量詞句などを含めた[動詞句(動詞+項)+付加的成分]レベルでの限界性を、数量詞の意味的研究の成果も踏まえながら仔細に観察した。

北原の議論では、対格の定名詞句による事象の限界づけ、いわゆる measuring-out

*3 したがって、外的限界は動詞の分類基準とはされていない(工藤 1995: 87)。

(「はかりとる」, cf. Tenny 1994, 北原 1999)の現象を日本語でも観察し、名詞句の意味的性質も限界性の議論の射程に収めている。また、数量詞句またはマデ句が非限界動詞句の限界化、限界動詞句の限界点の変更(動詞の語彙レベル→事態レベル)を動機づけることを指摘した。次の(4)~(6)は、数量詞句、マデ句が限界性に関与する事例である。

- (4)a. 太郎が その舗道／広瀬通りを 30分歩いた (北原 1999 : 168(7a))
 b. 太郎が その舗道／広瀬通りを 30分で歩いた (北原 1999 : 169(8a))
- (5)a. *太郎が30分舗道を2.5km歩いた (北原 1999 : 175(24a))
 b. 太郎が30分で舗道を2.5km歩いた (北原 1999 : 175(25a))
- (6)a. 太郎が 広瀬通りを東二番丁まで／終点まで 歩いた (北原 1999 : 182(45a))
 b. 太郎が 広瀬通りを??東二番丁まで／??終点まで 5分間歩いた (北原 1999 : 183(46a))
 c. 太郎が広瀬通りを東二番丁まで／終点まで5分で歩いた (北原 1999 : 182(47a))

限界性の検証としては時間幅を表す副詞句および期限を表す副詞句との共起テストが知られている⁴⁴。(4)では、非限界動詞句「歩く」が期間副詞「30分」とも期限副詞「30分で」とも共起できるのに対して、数量詞句を伴った(5)では、期間副詞が共起できない。非限界的運動が数量詞句「2.5km」によって限界化されているからである。同様の現象は、移動の終結点を示すマデ句でも確認できる⁴⁵((6)参照)。

結果として、北原は多層的なレベルにおける限界性確定のシステムを提示し、動詞の語彙的意味素性という静的な概念ではなく、動詞文が表す事態レベルでの動的システムとして限界性を捉えるという視座を提示している。限界性については、動詞句を中心とする事態レベルにおいて論じるべきことを日本語の言語現象の観察に

⁴⁴ ただし、「30分」のような期間副詞と「30分で」のような期限副詞が厳密に対等な役割を担っているかは、再検討の余地がある。期限副詞が既存の限界的事態について時間的情報を付加するだけであるのに対して、期間副詞は非限界的運動の時間的計量を行っていると解釈できるためである。つまり、時間副詞を伴った最終的な文の意味解釈としては、期間副詞は事態をはかりとっていると考えられることも可能である。両者のこうした非対称性は指摘されることがないと思われるが、重要な問題を含む可能性がある。

⁴⁵ マデ句と限界性については、松本 1997, 伊藤 2000, 影山・上野 2001も参照のこと。

よって指摘した点で、北原の指摘は大きな意味を持っているといえよう。

以上のように、限界性の概念は、動詞および動詞句・動詞文研究において、有効な理論的道具立てとして幅広く用いられており、その有効性は動詞研究における共通理解といってよい。限界性の適用範囲は研究者によって見解の相違が見られるものの、それは研究史的には建設的な、いわば正常進化であるといえる*6。

1.2. 限界性の適用限界と名詞句・経路句の問題

1.2.1. 「反復読み」の問題

北原によって限界性の適用範囲が動詞文が表す事態レベルで議論されるようになったことは大きな進展といえる。しかし、事態レベルの限界性について北原が説明しきれなかった問題がある。それは名詞句が表す実体の数的性質に起因する、動詞文が表す事態の限界性の転換である。この問題は、いわゆる反復読み(iterative/repetitive reading)*7において特に明らかになる。

- (7) *太郎が あの皿を/家宝の古伊万里の皿を 30分割った(反復の読みなら可)
(北原 1999: 174(18a) 波線は井本)

北原は対格名詞句の定性などが限界性の決定要因になりうることを指摘しながらも、(7)が反復解釈可能であることを解釈可能の条件として示すに留まっている。反復読みが可能になる条件はどのような場合か、反復の読みが文の文法性にどのように関与しているかについては言及されていない。しかし、北原の議論にとっても、反復読みは簡単には捨象できない問題である。なぜなら、限界的事態の反復読みには名詞句の数性が重要な要件となるからである。

*6 北原 1998, 北原 1999は限界性の基本的見解を工藤 1995に拠っており、限界動詞の限界性は事態レベルで限界点の変動した際にも保持されるとしている。このことは裏を返せば、非限界動詞句による継続的事態と限界動詞句を核とする多回的事態(いわゆる反復)との質的相違を示唆していることになるが、後述のように、北原 1999は反復解釈される事態については考察対象から外している。

*7 本稿は「反復」と「連続(succession. cf. Kano 1970)」の相違、すなわち事態参与者の異同については特に留意しない。また、本稿で「多回(的)」という呼称を使うことがあるが、これは、時間的に局所化された一定時間内における同種の事態の複数回の生起を指し、「反復」と「連続」を含む。したがって、時間的に非局所的な「習慣(habitual)」の解釈については考察対象外とする。

- (8)a. *太郎が あの1枚の皿を/家宝の1枚の古伊万里の皿を 30分割った
 b. *太郎が3枚の皿を5分割った (北原 1999 : 179(37a))

(8)は、対格名詞句の数的解釈を単数または特定複数に限定させた例で、反復読みは不可能であり、非文となることを免れない^{*8}。このことから、(7)での反復読みが当該名詞句の不特定複数解釈が可能であることから導かれたものであることがわかる。内的限界動詞「割る」が多回的意味を含意しているわけではないのである。しかも、反復読みでなければ非文になるのであるから、(7)が文法的であるためのもっとも重要な要件は、対格名詞句が不特定複数と解釈されうることである。

さらに、反復読みは核となる事態の回数性に関わる解釈であるにも関わらず、その解釈の根拠は名詞句の数的性質(不特定複数)だけである。名詞句の不特定複数解釈が事態の反復読みを動機づけ、文は非文であることを免れうるのである。対格名詞句など文中の動詞以外の要素が事態レベルの限界性に関与することを指摘するのであれば、反復読みが名詞句の数性から導かれること、それによって文法性が保証されるということを見捨てることはできないと思われる。

そもそも(7)を反復読みした事態「太郎が(不特定複数枚の)あの皿を30分割った」は非限界的事態といえるはずである。つまり、限界動詞が構成する動詞句の対格名詞句が不特定多数と解釈されうるとき、当該の動詞句の限界性は非限界的である余地を残していることになる。したがって、「[対格名詞句+限界動詞]は Telic な動詞句である(北原 1999 : 175(21A))」という規定は不十分である。北原は非限界動詞句の項である対格名詞句については、その定性(definiteness)・特定性(specificity)が問題になることを指摘しているが、限界動詞句についてもそれがいえる。「あの皿」のような定名詞句であっても不特定複数解釈は可能であるから、より厳密に言えば、「[特定の名詞句+限界動詞]は Telic な動詞句である」と規定する必要がある。

このように、動詞句レベル・事態レベルの問題を扱うためには、名詞句の不特定複数および事態の多回解釈を捨象することはできない。換言すれば、(7)の反復読

*8 こうした例について、次のような解釈を許す話者がいる。

(i) 太郎があの一枚の皿を30分割った=1枚の皿を、粉々になるように何回も割る
 先の(7)が対象物の個数を拡張することによって不特定複数解釈を可能にし、事態全体を多回的な非限界的事態と捉えたのに対して、(i)の読みは対象物の内部を内部分割することによって同様の解釈を可能にしたものと考えられる。このような読みはいわゆる「部分読み(partitive reading)」と呼ばれる解釈の一種と見てよいだろう。部分読みも反復読みと同様、事態の限界性の値を転換させる要因になりうるといえる。

みを捨象せざるを得なかったことは、限界性という概念の適用限界を示唆している。

1.2.2. 経路の空間的限定性の問題

同様の問題は、移動経路が関与する事例における経路の限定性にも見られる。

(9)a. 太郎がその舗道／広瀬通りを30分で歩いた (= (4b))

b. ??太郎が舗道を30分で歩いた (北原 1999: 171 (12a))

移動経路を表す対格名詞句の性質によって限界性の値は異なる。(9b)において「30分で」が共起しにくいのは、「太郎が舗道を歩く」という事態が非限界的だからと考えられる。この理由を北原は対格名詞句の定性(definiteness)と特定性(specificity)の問題として説明する。

(10) 特定のな名詞句と定名詞句は、指示対象の同定(identification)ができるから、事態の限界点に達する点の領域(domain)を特定することができる。

(北原 1999: 170)

(11) 特定のな対格名詞句と定の対格名詞句は、非限界動詞と共起すると、事態をはかりとる性質を潜在的に持つようになると言える。(北原 1999: 170)

定または特定のな名詞句は、事態を終結させる役割を担うので、「その舗道、広瀬通り」を経路ヲ格句としてとる非限界動詞「歩く」を述語とする動詞文(9a)は限界的事態を表す。英語でも同様の現象が見られることが報告されており(Tenny 1994, Jackendoff 1996), 北原は日本語の「はかりとり」の現象を正しく指摘したといえる^{*9}。

しかしながら、名詞句の定性と特定性による分析は説明力が弱いと言わざるを得ない。限界性は動詞の語彙的レベルか動詞句レベルでの事態の終結に関わる概念だが、それと定性・特定性が関与する(定性・特定性によって事態の限界性が左右される)ことを論証するためには限界性と定性・特定性との間の理論的横断性を示す必要がある。結局のところ、定／不定および特定／不特定の概念と限界／非限界の概念の相互作用を明らかにしなければ、名詞句の性質が事態の教性、ひいては文の

*9 Jackendoff 1996は前置詞句が事態をはかりとる例を挙げ、直接目的語だけが事態をはかりとることができるとする Tenny 1994の反例としている。北原 1998が指摘したマデ句の事例は Jackendoff 1996の指摘した英語の現象とも並行的であるといえる。

文法性を左右する理由は説明されないまま残されることになる。事態の終結に関わる名詞句の性質のために定性と特定性を導入するのは、直観的には頷けるものの、理論的動機に欠けると思われる。

このように考えると、実体の数性、経路の空間的限定性と、事態の終結性の間の相関関係を捉えることができる理論的道具立てが求められることになる。統一的概念による説明が理論的説明力・経済性の点で優れていることは言を俟たない。

2. 有界性の導入

前節までの議論をまとめると、まず、動詞の語彙的意味素性として動詞分類の精緻化に寄与した限界性は、動詞句が表す事態レベルでの終結点の問題にも適用され、より広範な事例についての説明を可能にした。しかし一方で、名詞句が表す実体の数性を扱うことができないという適用範囲の問題も残された。特に、名詞句の数性に関わる事態の反復読みや経路の限定性については、説明を保留する、あるいは定性・特定性といった異なる概念を持ち出すという形で処理せざるを得ないことになった。本節での課題は、実体を持つ数的性質と動詞句・事態の限界性との関連性を規定できる理論的道具立てを導入することである。そしてそのために導入されるのが、有界性という概念である。

2.1. 有界性に関する従来の見解

ここでは、理論言語学での先行研究を中心に、有界性に関わる意味的性質や共通理解を確認する。端的に言えば、有界性とは事態と実体の数的並行性を捉える概念で、多くの論考ですでに指摘されている (Carlson 1981, Jackendoff 1983, Bach 1986, 白井 1989, Jackendoff 1990, Langacker 1991, 石田 1998 など)。ここでは、その共通理解となる見解を Jackendoff 1990, 白井 1989 から引用する。

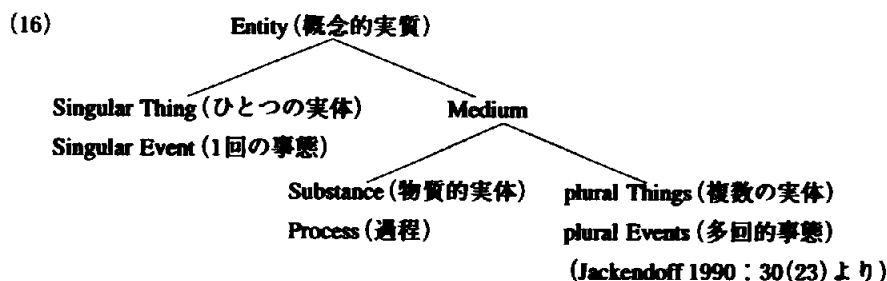
- (12) ...it has often been observed that the bounded/unbounded (event/process, telic/atelic) distinction is strongly parallel to the count/mass distinction in NPs. An important criterion for the count/mass distinction has to do with the description of parts of an entity. ...This same criterion applies to the event/process distinction.

(Jackendoff 1990 : 29)

- (13) 出来事 : プロセス = 可算 : 不可算

(白井 1989 : 80(6))

(12)(13)は事態における限界的な「出来事」(Vendler 1967における動詞(句)のタイプのうち Accomplishments と Achievements に相当)と非限界的な「プロセス」(同 Activities に相当)の対立が実体における可算と不可算の対立に等しいことを指摘したものである。このように、可算の実体と限界的事態、および不可算の実体と非限界的事態の間には、実体と事態という意味範疇と交叉する並行関係が認められる。こうした並行性から、実体と事態の概念的性質は(16)のように体系化できる^{*10}。



(16)からわかるように、実体と事態とはともに同一の概念体系のもとに収まる。そして、この体系を見ると、日本語研究における限界性の適用範囲が広く見積もっても各項下段(事態)に限られていることがわかる(過程と多回的事態の差異を捨象する見解もある)^{*11}。これまでの視座では、実体に関する体系が捉えられていなか

*10 なお、有界性に関する実体と事態の概念的並行性に関して、文法カテゴリは本質的問題ではない。たとえばフィンランド語は välkähän "flash once"/välkhdellä "flash repeatedly"のように、事態の回数性(1回/多回)を標示する形態素を持つとされる(Carlson 1981:43. ff.14.)。しかし英語では事態の回数性の標示は義務的ではないが、事態の多回の解釈は可能である。日本語の実体の数性および事態の回数性についても同様のことがいえるはずである。これについて、仁田1992も本稿と同様の見解を表明している。「日本語の名詞が、それが指し示す指示対象の数的異なりの表し分けを、文法カテゴリとして有していない、といったことは、なにも、日本語の名詞が、数的異なりを意味的にも全く表し分けることができない、といったことや、指示対象の数的異なりが文法現象に全く跳ね返らない、といったことを、直ちに意味しはしない(：606-607)」

*11 北原1999のように、反復読みの可能性を telic であることの証拠とする議論(：173-174)を考えれば、多回的事態もその射程に収めているといえる。ただし、(16)における実体と事態の並行性(各項上下段)が捉えられていない。

ただだけではなく、事態と実体が Entity, および Medium(非限界性・不特定複数性を包含する概念)という上位概念のもとに並行的に位置づけられることもなかった。したがって、実体の複数性から得られた反復解釈などは説明できなかつたのである。

本稿で問題提起した事例は、概念的範疇を横断する汎範疇的概念である有界性を適用することではじめて説明可能になる。つまり、名詞句が表す実体の数性に関する解釈可能性は、並行的に動詞文が表す事態の回数性に関する解釈可能性であり、実体の数性が文の文法性要件となる事例の場合には、実体の不特定複数解釈と連動して動機づけられた事態の多回的解釈(=反復読み)が可能になると考えられる^{*12}。このように、有界性の概念を適用することで、実体の複数解釈によって事態の反復解釈が動機づけられることの説明が可能になる^{*13}。

2.2. Jackendoff 1992

Jackendoff 1992 は、(16)の体系など先行研究の成果をもとに、有界性を汎範疇的な概念的素性として定式化することを提案している。(17)がその素性である。

(17)a. $\pm b$ (boundary): 境界

b. $\pm i$ (internal structure): 内部構造

$\pm b$ は境界の有無に関する値である。例えば可算名詞 *apple* はそれ自体固有の境界を有し、外界との明確な隔絶を含意する。したがって値は $+b$ である。一方、不可算名詞 *water* は外界との境界が不分明であり、それ自身が固有の境界を有しているとは把握されない。したがって、その値は $-b$ である。

もうひとつの素性 $\pm i$ は内部構造に関する値である。例えば *three apples* の場合、名詞句全体は3個のリンゴからなり、しかもリンゴ1個1個に分割できる。それ自身の内部に境界を有するといってもよい。したがって値は $+i$ である。しかるに *water* の場合、それ自身の内部を仕切る境界を持たないから、その値は $-i$ である。

*12 奥野 1992 は名詞句が内包する複数性が事態に波及しようという仮説を提出している。

(i) 複数性波及の仮説

「複数」を表す名詞句は、動詞が集団行為を表すものでなければ、動詞によって表される行為やできごとの数を複数化することができる。(奥野 1992: 81(16))

*13 なお、影山 2000 も有界性の概念を用いて、日本語と英語における動詞の名詞化現象を考察しているが、有界性に関する影山 2000 と本稿の見解は大きく異なっているので、本稿を影山 2000 と同様の接近法をとるものとして位置づけることはできない。

このような外界との境界と内部の構造化の素性によって、実体は(18)のような素性の対立によって分類される。(19)は日本語名詞句の例である。

- (18)a. +b, -i: individuals (a pig)
 b. +b, +i: groups (a committee)
 c. -b, -i: substance (water)
 d. -b, +i: aggregates (buses, cattle)

(Jackendoff 1992: 20(11))

- (19)a. 1個のリング=+b, -i
 b. 3個のリング=+b, +i
 c. 空気=-b, -i
 d. たくさんのリング=-b, +i

このような素性の対立は実体の意味範囲だけでなく、動詞句およびそれによって表される事態の意味範囲にも適用される。次の(20)は、事態の限界性に関する対立を有界性の素性として形式化したものである(英語の例は Jackendoff 1992: 20より)。

- | | |
|---------------------------|--------------------------------|
| (20)a. +b, -i: 上野駅に到着した。 | John ran to the store. |
| b. +b, +i: 日が沈むまで薪を割った。 | The light flashed until dawn. |
| c. -b, -i: 太郎が部屋にいた。 | John slept. |
| d. -b, +i: マウスを何度もクリックした。 | The light flashed continually. |

このような境界と内部構造という共通の素性による分析を適用することによって、名詞句として表される実体と動詞句を中心として表される事態とを統一的に扱うことができる。したがって、実体の意味的性質について定性や特定性といった異なる概念を導入する必要はなくなる。

さらに、「部屋にいた」のような継続的事態と「マウスを何度もクリックした」のような反復的事態との差異についても、形式的に明確な規定を与えることができる。継続的事態は、その内部分割ができない、つまり内部構造を持たないので、その素性は[-b, -i]である。一方、反復的事態は、非有界性であることは継続的事態と共通であるが、当該的事態を核とする1回的事態に内部分割することができる。つまり内部構造を持つと考えられるので、その素性は[-b, +i]である。これで、両者の意味的相違が内部構造に起因するものであることがわかる。本稿の議論に即して言えば、継続的事態と反復的事態とを意味的に区別しない立場とは、有界性に

における内部構造の差異を捨象する立場であるとする事ができる。

なお、Jackendoff は有界性を素性分析として捉えただけではなく、要素間の意味的整合化を図る解釈規則(Rules of construal)^{*14}や有界性の値の転換を行う概念関数(conceptual functions)^{*15}によって、事態と実体の意味的相互作用に関わる事例に対する理論的説明を可能にしている^{*16}。

3. 有界性の適用と日本語動詞文の分析

前節で概観した有界性の基本的概念と素性分析による定式化は、第1節で問題にした動詞文の限界性に関わる事例をシンプルかつ明確に説明することを可能にする。有界性は事態の限界性だけではなく、実体の数性や特定性、経路の空間的限定性もその射程に収めるからである。

*14 脚注10でふれたように、英語や日本語では事態の回数性は義務的文法範疇ではないので、語彙的要素に依存しない多回解釈が出る可能性がある。

(i) The light flashed until dawn. (Jackendoff 1992: 15(5))

(ii) 日が沈むまで薪を割った。 (= (20b))

語彙の意味から得られないこのような多回解釈は、文中の要素間の有界性の整合化から導出される計算的解釈と考えられる。つまり、有界的事態はそれ自身境界を持つので、直接的に外的有界化を受けることは理論的に不可能である。これは不正な形式(ill-formed)であるから、正しい解釈を得るためには、このような不整合を回避する必要がある。こうした不正な形式を回避する方策が解釈規則であり、(i)(ii)の例では解釈規則によって複数化関数 PL(脚注15参照)が導入される。複数化によって有界的事態は非有界化され、外的有界化を受けることが可能になるのである。

*15 概念関数には、個体[+b, -i]を集団[-b, +i]に転換する複数化関数 PL(plural)や非有界の実質[-b]を有界の実質[+b]の構成物として写像する外的有界化関数 COMP(composed of)、有界の実体[+b, ±i]を物質化[-b, -i]にする非有界化関数 GR(grinder)など6種が定義されている。たとえば、英語の複数形接辞-sは項を複数化する機能範疇で、語彙記号事項に PL 関数を持つ関数である。-sを伴うことによって、個体は PL 関数の項として集団に写像されることになる。このような定式化の利点は、複数化した有界の実体と非有界の実体の素性が出力としては同じであっても、その性質の違いを構造的に明示できることである。

*16 なお、Carlson 1981は Jackendoff 1992のような素性分析をとらない。Carlsonは water/some waterなどの例から、素性分析がとれるほど言語事実は単純ではないと考えているためである。Jackendoffはこうした問題を、概念関数による素性転換などによって処理しようとしている。詳細については Jackendoff 1992を参照されたい。

3.1. 対格名詞句の数性と反復読み

まずは、限界性の議論で捨象せざるを得なかった反復読みについてみてみたい。例を一部改変して再掲する。

- (21)a. 太郎があの皿を30分割った。(反復読みした場合。(7)改)
b. *太郎が3枚の皿を5分割った。(= (8b))

(21a)が文法的なのは反復読み、つまり動詞文が表わす事態が多回的生起と解釈されるときに限られる。そして、(21b)のように対格名詞句の数を定めるとその多回解釈は阻止され、非文となるのであった。これを対格名詞句が表わす実体の有界性と、それに連動する事態の有界性から説明しよう。

(21a)の対格名詞句「あの皿」はダイクティックには定名詞句であるが、数についての標示はない。したがって、「皿」は可算の実体を表わすから、「あの皿」の有界性の素性は $[-b, +i]$ でありうる。一方、(21b)の「3枚の皿」はダイクティックには不定名詞句であるが、数については、その数量が明示されている。数量を明示することはその名詞句が表わす実体の境界が定められているということであるから、「3枚の皿」の有界性は集合 $[+b, +i]$ である。同じ複数でも、数量が確定しているかどうかで境界の値 $\pm b$ の値が異なることに注意されたい。

一方、述語動詞「割る」が語彙的に対象物の状態変化を含蓄する変化他動詞であること、反復読みできることなどから、核となる事態「(1枚の)皿を割る」は有界的事態 $[+b, -i]$ である。北原1999の指摘通り、このままでは非有界的时间域を表わす期間副詞とは共起できず、非文となってしまう。そこで、この事態を非有界化する必要があるが、それは実体の有界性の値によって動機づけられる。

集団行為を要求する動作・事態でないかぎり、有界的事態 $[+b, -i]$ に関わる実体の数は1である(cf. 奥野1992)。有界的事態 $[+b, -i]$ の回数は対格名詞句の数に相同すると考えられる。つまり、「(1枚の)皿を割る」という事態は皿の数だけ生起しうる。これが奥野1992の「複数性波及の仮説」であり、実体の複数性から事態の反復読みが導かれる理由である。実体の有界性が $[-b, +i]$ であれば、有界的事態も $[-b, +i]$ となる。ただし、有界的事態 $[+b, -i]$ の素性を恣意的に変更することは許されないし、単一の「割る」事態が $[-b]$ と考えることはできない(1回の非有界的事態は過程である)。そこで、これを複数化を行う概念関数 PL に写像して複数化することで $[-b, +i]$ の素性を得るのである(脚注14, 15参照)。複数化関数 PL は複数の実体にも同じように導入されており、素性の転換としては実体と事態は

同じ理論装置の適用を受けているが、ここにも、実体と事態の並行的性質が反映されている。そもそも、反復読みは恣意的な解釈ではない。(21a)には反復読みされる理由があり、それは実体の有界性との連動と有界性の素性転換を動機づける概念関数によって動機づけられているのである。

なお、(21b)が複数であるのに反復読みが許されず、非文になってしまう理由も、有界性から説明できる。(21b)の対格名詞句の有界性は[+ b, + i]なので、実体と事態の有界性が連動しても[- b, + i]という素性は導出されないからである。

3.2. 経路の限定性

次に、経路を表わす対格名詞句・マア句、そして数量詞句がもたらす経路の空間限定性の含意と事態の終結性について説明を試みる。北原 1999 が指摘したように、経路を表わす対格名詞句の定性や特定性、マア句による空間的(あるいは時間的)終結点の明示、そして数量詞句による計量は、すべて事態のはかりとりに寄与するのであった。それはその通りであるが、定性・特定性、あるいは空間の限定性という諸概念と事態の終結との間の理論的横断性については未解決であった(1.2.2節参照)。こうした経路句などの性質は、有界性の素性によって捉えることができ、これによって、事態の終結と経路の限定との連動可能性が説明できる。

経路句を表わす対格名詞句については、限界動詞句の対格名詞句と同様の説明が可能である。その空間的範囲が特定される経路の素性は[+ b]なので、非限界的運動に境界を与え、事態を有界化するのである。不定・不特定の経路句は[- b]だから、事態を有界化することはできない。(22)の例がそれを示している。

(22)a. JAL704 便は太平洋上空を 7時間/??7時間で 飛行した。

b. JAL704 便は成田-ホノルル間を ??7時間/7時間で 飛行した。

経路句を有界性で捉える見解は、Jackendoff 1983 を継承した影山・上野 2001 にみられる。影山・上野は経路(Path)を有界性によって大別する。

(23)経路(Path)

a. 有界の経路(Bounded Path)

- i. 着点(Goal): to the park, onto the table, into the box
- ii. 起点(Source): from the park, off the table, out of the box

b. 非有界の経路 (Unbounded Path)

i. 方向 (Direction)

(a) 着点指向の方向: toward the destination

(b) 起点指向の方向: away from the station

ii. 中間経路 (Route): along the street, down the hill, through the tunnel,
across the desert, over the mountain, by the gate

(影山・上野 2001: 44(9))

マデ句についても、それが空間的終結点であれ、時間的終結点(cf. 松本 1997)であれ、基本的には[+ b]の素性を持つと考えることができる*17。影山・上野などの見解を支えとして考えると、空間移動事態の終結に関して、経路句の定性・特定性といった概念を用いる積極的な理由は失われるといえる。移動事態の有界性は経路句などの素性を源として決定されると捉えられるからである。経路句の性質と移動事態の終結は、有界性という上位概念によって並行的に捉えられるのである。

また、数量詞句も基本的には同様の機能を持つと考えられる。数詞と助数詞で構成された数量詞句の素性は[+ b]である*18。したがって、数量詞句を伴った非限界

*17 なお、北原 1998 で示唆されている「到達範囲読み」は、移動対象がマデ句が表す地点までの到達を含蓄しない解釈であり、期間副詞と共に起ることが可能であるとされる(北原 1998: 96(14a), 北原 1999: 183(48))。これについては、まだ明確な回答を持たないが、参照点への到達であっても範囲指定であっても、そして移動の始点に境界を与えられないという問題はあっても、それはマデ句が[+ b(終端の境界)]を表すことに大きな支障はないと思われる。これについては今後さらに検討したい。

*18 ただし、その内部構造は一様ではないと思われる。北原 1996 によると、数量詞句は計量方法の違いから二種類に分類される。

(i)a. みかんを 40 買った (北原 1996: 30(4a))

b. みかんを 2kg 買った (北原 1996: 30(4b))

北原 1996(: 30) は、(ia) の「40 個」のように構成要素全体を個別的・離散的に計量する数量詞を「個体数量詞」、(ib) の「2kg」のように構成要素をまるごと計量する数量詞を「内容数量詞」と呼び、区別している。こうした数量詞の差異は内部構造 i の素性として表すことができると考えられる。つまり離散的に構成要素を計量する個体数量詞の有界性は[+ b, + i]、対象全体をまるごと計量する内容数量詞の有界性は[+ b, - i]である。こうした相違が事態の有界性にどう関与するかはまだ明らかではないが、こうした数量詞の性質の違いも有界性の素性分析で捉えることができると考えられる。

動詞句は事態レベルにおいて有界的と判断されるのである。例を再掲する。

- (24)a. 太郎がその舗道を30分歩いた。(=(4a)改)
 b. *太郎が30分その舗道を2.5km歩いた。(=(5a))

3.3. その他の事例

有界性の適用が有効な事例は前節までの例に限らない。以下に挙げる事例は、動詞文の文法性が限界性だけでは説明できないものであり、いずれも実体と事態の数的並行性に関する興味深い現象を提供するものである。

- (25)a. 授業中に、太郎が寝はじめた。
 b. 授業中に、学生が寝はじめた。
 (26)a. *太郎が学校に到着しはじめた。
 b. 学生が学校に到着しはじめた。
 (27)a. 観光客が吊り橋を渡りすぎて、橋が傷んでしまった。
 =観光客の数が多過ぎる。(井本2000:197(15))
 b. その馬は石畳を走り過ぎて、蹄がすりへってしまった。
 =走った距離・時間が長過ぎる。(井本2000:197(16))
 c. この飛行機は成田-N.Y.間を飛び過ぎて、老朽化が激しい。
 =飛んだ回数が多過ぎる。(井本2000:197(17))

(25)は複合動詞後項「はじめる」を含む統語的複合動詞句「寝はじめる」を述語に持つ動詞文であるが、(25a)では「太郎が寝る」という単一の事態が開始したという解釈しかないが、(25b)では、その解釈に加えて「(1人の)学生が寝る」という事態の多回のかつ連続的生起が開始したという解釈もできる。この解釈は(25a)が持つ事態の開始局面という解釈を基盤とした、多回的に生起した事態の開始局面という解釈であるが、この拡張は主格名詞句の数性を源としているので、有界性の素性で説明することが妥当であろう。また、「～はじめる」が限界動詞句と複合動詞句を構成した際には、名詞句の数性が文法性の要件となることがある((26)参照)。そもそも「～はじめる」は前項に継続的(=非有界的)な事態を要求する。したがって、「学校に到着する」というような動詞句とは共起できないはずだが、非有界的名詞句「学生」によって、前項の事態全体を非有界化させることによって、その共起が可能になるのである。

(27)は由本1997および井本2000で指摘された[[経路ヲ格名詞句+移動動詞]+「過

ざる]]の意味解釈の事例である。ここでは経路句だけでなく、主格名詞句の有界性をも含めた解釈の可能性が示されている。(27a)では経路は有界的であるが、主格名詞句は非有界的なので、「過ぎる」による[過剰]の解釈は主格名詞句の数量に及ぶ。(27b)では経路句が表わす空間が非有界的なので事態も非有界的となり、[過剰]の解釈は移動事態に関わる時間・距離の量に及ぶ。さらに(27c)では経路句も主格名詞句の数性とともに有界的なために、事態の回数性のみが[過剰]の解釈を受けることができるため、事態の多回解釈が出る。「過ぎる」による[過剰]の解釈は文中の多様な要素に及びうるが、その解釈可能性は有界性から予測することができる。

以上概観した言語現象についてのより詳しい分析と説明には有界性の定式化が必要であるが、紙幅の都合上、今回は割愛せざるを得ない^{*19}。しかし、こうした事例に対して、動詞に関わる意味概念である限界性だけで説明することは困難であり、定性、特定性といった概念を導入したところで、その理論的動機づけは乏しく、限界性との理論的関連性は明らかではない。しかし、有界性の概念を導入することで、実体の可算性と事態の多回性に関わる両者の概念的並行性に対する理論的保証が与えられ、反復読みや実体の複数読み要件など、事態の意味解釈の問題に対する理論的説明が可能になる。

4. おわりに

日本語の動詞文において、名詞句の数性や経路句の限定性などが事態の終結に関与する事例、特に多回性と実体の複数性との間の相互作用的関連性に対しては、従来採用されてきた限界性(+定性・特定性)よりも、有界性およびその素性分析が有効である。これによって先行研究において捨象されてきた日本語動詞文の意味解釈研究のさらなる進展が期待できると考えられる。ただし、本稿では Jackendoff 1992 で展開された有界性の定式化の詳細や具体的な事例への適用について論じきれなかった部分も多い。これについては稿を改めて論じたい。

*19 Jackendoff 1992, およびその発展モデル(Jackendoff 1996)を日本語の分析に採用した論考には、井本1999, 井本2000, 伊藤2000, 岩本2001a, 岩本2001bなどがある。

参考文献

- 五十嵐実子・山田小枝 1982 「言語における反復現象について」『電子技術総合研究所 彙報』Vol.46. No.12. 電子技術総合研究所
- 石田秀雄 1998 「有界性の問題—可算名詞と不可算名詞の区分にかかわる認知的基盤—」『大阪教育大学英文学会誌』第44号 大阪教育大学英語英文学教室
- 伊藤真哉 2000 「事象解釈における限界点の機能について」神田外語大学修士論文
- 井本亮 1999 「「ほど」構文の解釈と主文の有界性について—述語動詞句の動詞分類を中心に—」『筑波日本語研究』第4号 筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
- 井本亮 2000 「複合動詞「過ぎる」の意味解釈について」第121回日本言語学会秋季大会予稿集
- 岩本遠値 2001a 「進行相と二格後置詞句の認可について—概念意味論による接近法—」『COE 形成基礎研究費 研究成果報告(5)』神田外語大学
- 岩本遠値 2001b 「空間関係を表す「を」格と行路の稠密性について」『言語科学研究』7号 神田外語大学大学院
- 奥野浩子 1992 「「複数性」について」『弘前学院大学・弘前学院短期大学紀要』第28号 弘前学院大学・弘前学院短期大学
- 影山太郎 1996 「動詞意味論—言語と認知の接点—」くろしお出版
- 影山太郎 1997 「単語を超えた語形成」中右実編 影山太郎・由本陽子共著『日英語比較選書8 語形成と概念構造』研究社出版
- 影山太郎 2000 「日英語の名詞化と有界性」『人文論究』49巻第2号 関西学院大学人文学会
- 影山太郎・上野誠司 2001 「移動と経路の表現」影山太郎編『日英対照 動詞の意味と構文』大修館書店
- 北原博雄 1996 「連用用法における個体数量詞と内容数量詞」『国語学』186集
- 北原博雄 1998 「移動動詞と共起する二格句とマア格句—数量表現との共起関係に基づいた語彙意味論的考察—」『国語学』195集
- 北原博雄 1999 「日本語における動詞句の限界性の決定要因—対格名詞句が存在する動詞句のアスペクト論—」黒田成幸・中村捷編『ことばの核と周縁—日本語と英語の間—』くろしお出版
- 工藤真由美 1995 「アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—」ひつじ書房
- 白井賢一郎 1989 「動詞と数—可算性と動詞の意味的アスペクト—」『言語』Vol.18. No.9. 大修館書店
- 須田義治 2000 「限界性について—限界動詞と無限界動詞—」『山梨大学教育人間科学部紀要』Vol.1 No.2. 山梨大学教育人間科学部
- 仁田義雄 1992 「日本語名詞の数概念の表示について」文化言語学編集委員会編『文化言語学—その提言と建設—』三省堂

- 松本曜 1997 「空間移動の言語表現とその拡張」中右実編 田中茂範・松本曜共著『日英語比較選書6 空間と移動の表現』研究社出版
- 矢澤真人 1986 「反復の運用修飾成分—「動詞句の素性と反復表現の構文論的考察」試論—」『国語国文論集』第15号 学習院女子短期大学国語国文学会
- 矢澤真人 2000 「副詞的修飾の諸相」仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人共著『日本語の文法1 文の骨格』岩波書店
- 由本陽子 1997 「動詞から動詞を作る」中右実編 影山太郎・由本陽子共著『日英語比較選書8 語形成と概念構造』研究社出版
- Bach, Emmon 1986 *The Algebra of Events. Linguistics and Philosophy*. Vol.1. No.9.
- Carlson, Lauri 1981 *Aspect and Quantification. Syntax and Semantics. 14. Tense and Aspect*. Academic Press.
- Jackendoff, Ray 1983 *Semantics and Cognition*. MIT Press.
- Jackendoff, Ray 1990 *Semantic Structures*. MIT Press.
- Jackendoff, Ray 1992 *Parts and Boundaries. Lexical & Conceptual Semantics*. Eds. Levin, Beth and Pinker, Steven. Blackwell.
- Jackendoff, Ray 1996 *The Proper Treatment of Measuring Out, Telicity, and Perhaps Even Quantification in English. Natural Language and Linguistic Theory*. 14. Kluwer.
- Kuno, Susumu 1970 *Feature-changing Rules in Semantics. Mathematical Linguistics and Automatic Translation to the National Science Foundation: Report No. NSF. 24. The Computation Laboratory of Harvard University*.
- Langacker, Ronald W. 1991 *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar. Cognitive Linguistic Research 1*. Eds. Dirven, René and Langacker, Ronald. Mouton de Gruyter.
- Tenny, Carol 1994 *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface. Studies in Linguistics and Philosophy 52*. Kluwer.
- Vendler, Zeno 1967 *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.

(2001年6月28日 受理)